

(6) 形成外科

概要

(a) 形成外科の新設にあたって

形成外科は、成育医療センターの開設と同時に新設された科のひとつであるが、実際は1975年に耳鼻咽喉科医員であった長田光博先生が、東海大学形成外科開設にともない教授（現名誉教授）として赴任されて以降も、整形外科外来において非常勤として診療を続けてこられた。更にその後、国立東京医療センター形成外科前医長杉本智通先生、短期ではあるが慶應大学形成外科中嶋英雄助教授、小林正弘講師（現慶應大学看護医療学部助教授）の参加によって支えてこられた。この間は手術が必要な患者さんは、主として東海大学または慶應大学に紹介し治療を行っていたが、平成13年4月に現医長の金子が非常勤医師となり出来るだけ国立小児病院で行うこととした。しかし手術枠に限界があり十分ではなかった。この間の歴代整形外科医長村上宝久先生（故人）、坂巻豊教先生はじめ整形外科スタッフの先生方のご協力に対してこの場をお借りして深謝いたします。

(b) 形成外科の目標

形成外科は、体表とそれに近い組織の先天性、後天性欠損の形態的、機能的再建を行い、患者の社会復帰を助ける外科の一分野である。

当院形成外科の一般目標として、患児の身体的、精神的成長を考慮した治療を行うこと、非侵襲的治療を推進すること、そして標準的治療体系が無い疾患について、上記の基準に従った体系の確立を推進することとしている。

特に重点をおいている疾患群としては、小耳症を含む耳介先天異常、唇顎口蓋裂、頭蓋顎顔面異常、四肢先天異常、顔面神経麻痺、Vascular anomaly（血管腫、リンパ管腫）などである。これらについてチーム医療を行い標準的治療体系の確立を推進することを目標としている。

またDown症などの先天異常に対する整容手術の可能性についても今後検討してゆきたい。

(c) スタッフの構成

専門診療科の1単位である、医長、医員、レジデント各1名からなる。本年度はレジデントの派遣が得られず、整形外科日下部浩先生になっていただいた。従って実質2名で診療を行った。

医長

金子 剛（慶應義塾大学1981年卒）

主な研修歴は形成外科、脳神経外科、頭頸科、外科、麻酔科である。平成元年から1年間米国ワシントン大学形成外科、セントルイス小児病院Cleft Palate and Craniofacial Deformities Instituteにてclinical research fellow。平成5年10月より慶應義塾大学医学部形成外科学専任講師。平成14年3月1日国立成育医療センター形成外科医長現在に至る。主な関心領域は唇顎口蓋裂、耳介先天異常、マイクロサージャリーである。

医員

森 文子（慶應義塾大学1996年卒）2002年4月1日（2003年1月より休職中）

佐久間恒（慶應義塾大学1997年卒）2003年1月より着任した。

いずれも外科研修2年を行っている。佐久間は清瀬小児病院で1年間小児外科研修を行っている。

臨床実績

(a) 外来

形成外科外来：月、水、金曜日午前中3H-6にて行っている。初診はすべて金子医長が担当している。

口蓋裂チーム外来：第4金曜日午後、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科と共同で3H-1にて行っている。2002年6月28日より開始した。鼻咽喉ファイバーにより鼻咽喉腔閉鎖不全の診断を行っている。

これらの外来患者数は別稿の医事統計を参照されたい。ただし初診患者数は病院の初診のみをカウントするので、形成外科初診患者の実数を反映しているとは言えない。

(b) 手術

火曜、木曜の午前午後を中心に手術を行っているが、外来終了後にも短時間の手術を行っている。手術件数の総数は200件(日帰り全麻及び局麻5件を含む)であった。当初は日帰り手術を推進していたが、外来患者数の増加のため、午後の手術開始時間が遅くなることが多く、最近はやむを得ず減少している。

手術件数の月別の推移と内訳は以下のとおりである。

推移

年度	2002										2003			計
	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
件数	2	6	17	13	19	24	9	16	18	20	9	18	29	200
日帰り	1	1	4	3	2	1	3	4	1	3	0	1	0	24

手術件数の内訳

顔面軟部組織損傷 4、口唇裂 35(うち初回手術9)、口蓋裂 14、手足の先天異常 17、手足の外傷 3、耳介先天異常 43(うち小耳症初回手術15)、その他の先天異常 21、母斑・血管腫・良性腫瘍 36、悪性腫瘍およびそれに関連する再建 2、瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド 9、その他(抜糸、創傷処理など)16 計200件。

このなかには、マイクロサージャリーによる遊離複合組織移植術3件、脳神経外科と共同で行った頭蓋縫合早期癒合症に対する頭蓋形成術3件を含んでいる。

(c) 褥創対策小委員会としての活動

2002年10月からの褥創対策未実施減算にあわせ、当院でも褥創対策チームが発足された。当院においては単に褥瘡だけでなく wound care 全般を扱うことになっている。金子が委員長に任命され、小沼副師長を中心に、皮膚科、外科の協力を得て回診と治療を行っている。現在のところ成人型の褥瘡はほとんど発生していないが、重症患者数を反映して皮膚損傷が散見されている。体圧分散マットの効果的な使用、創傷被覆材と軟膏療法の適切な使用、清潔の保持などにより早期に回復している。

教育活動

(a) 施設認定

日本形成外科学会から、教育関連施設(国立小児病院より継続)として2003年2月に認定された。当院での形成外科研修は2年間まで形成外科学会専門医資格に必要な研修年限に組み入れることができる。

(b) 成育医療センター院内講演

褥瘡の外科的治療 金子 剛、2002年9月30日、講堂、看護部秋季セミナー

点滴漏れ - その原因と対策 - 森 文子、2002年12月4日、運営部会議室1・2、褥瘡小委員会主催

(c) 院外教育活動

金子医師は慶應義塾大学形成外科非常勤講師として、隔週土曜日の小耳症外来にて診療指導と年1回の講義を担当している。本年度は5月27日に“口唇口蓋裂および形成外科で扱う先天性疾患について”を担当した。また日本福祉専門学校言語聴覚療法学科においても年1回“口蓋裂と鼻咽腔閉鎖不全”の講義を担当している。本年度は6月20日(木)に行った。

(d) 専門医指導

森医師は2003年1月の形成外科学会専門医試験に合格した。